

蒼々亭追憶

山田正平

12p

大鹿さんの亡くなった、昭和廿四年二月一日は、實は私の満六十才の誕生日でもあった。知りぬか佛、赤飯をいただいたり、何やらしりえ、それに庭の落つとうと添えたりして折からの来客とや酌、けに泡沫さながらの過去に、いささか感懐を催すものもあって、其日さおあり、訃報に接した。その翌朝であった。大鹿さんとはほとんど私と同年のはず、上でも半歳ぐらいか。

私が妻と病院へお見舞いた時は、もうこの月のうちには退院、いかも待望のお孫さんも近、生れると聞いてこんな調子あり、大鹿家には春かえると、固く信じこみ喜んでいた。しかし一向に退院通知はなく、不審にもおもって、いたがまあ無情である。戦後の混乱期、私の家で不幸が起き、急場費用に困って、夜おそく大鹿さんを探ねへ頼んでみよ、手許にちろく、姉さんかの家ま